

# 低炭素社会における「カワイイ移動体」と その有効性に関する研究

## A Study on the KAWAII-Vehicle

## and it's Relevance to the Low Carbon Society

研究代表者：龍谷大学社会学部教授 工藤保則

(Ryukoku University Faculty of Sociology , Yasunori Kudo)

共同研究者：武庫川女子大学生生活環境学部教授 藤本憲一

(Mukogawa Women's University Faculty of Human Environmental Sciences ,  
Kenichi Fujimoto)

奈良女子大学文学部准教授 寺岡伸悟

(Nara Women's University Faculty of Letters , Shingo Teraoka)

低炭素社会において主役となるであろう「あらたな移動体」は、そのかたち・デザインは現在のものとは変わってくるように思われる。他のものに先んじてデザインの変化があった電車には「カワイイ」ものもあらわれ、電車マニア以外にも「乗りもの」としての楽しさ、「乗ること」の楽しさを与え、さらには地域の変化までうんでいる。またこの「カワイイ」という感性は、現在、デザインや建築の分野において特に注目されるものであり、その重要性は他分野へも広がってきている。

本研究では電車の事例等にも学びながら、このあらたな「カワイイ移動体」について、「ものとの社会学」的見地から、また「情報美学・生活美学」的見地から実証的な研究を行う。同時に、自己-他者間の、また自己言及的なコミュニケーションとも深くかかわる「カワイイ」という美意識そのものについても考えていく。

The shape and design of the "new vehicle" which is highly appreciated in a Low-Carbon society is significantly different from that of the current vehicles. For example, we can see the train whose design has already changed. They describe these new trains as being "Kawaii (cute)". People find a fun like a toy and a pleasure of "riding" in them. There is also the case which has made a community change. The sense of "being Kawaii" attracts attention also in the field of design and architecture, and the importance has spread to many other fields.

In this research, we study this "Kawaii-ness", from the sociological and an "information aesthetic and life aesthetic" standpoint. And we consider the structure of the aesthetic sense of "being Kawaii." The consideration will be deeply concerned with the self-referential communication and with the communication between the self and others.

## 1 研究目的

前年度までの研究において「近未来の都市交通のひとつのかたち」と考えられた超小型カワイイクルマ（EV）について、その社会的・文化的な価値をより深く考えることを今年度の研究の目的とした。その際、とくに超小型カワイイEVにおけるコミュニケーション性に注目することにした。

## 2 研究経過

研究代表者と共同研究者は2か月に1度の割合で研究会を開催し議論を行った。そのうちの一度は認知心理生理学の立場から「カワイイ」について研究を行っている広島大学総合科学部の新戸野宏准教授をゲストに迎え、ご研究内容に基づいた講演をしていただいた（武庫川女子大学生生活美学研究所内「情報美学研究会」との共催研究会）。また、東アジアの都市交通を調査するために研究代表者は2012年9月にクアラルンプールとシンガポールを訪れた。また2013年3月に全員で香港を訪れ調査を行った。

## 3 研究成果

### 1) クルマが社会を作る

デザイナーの原研哉は著書『JAPAN CAR』において「クルマの歴史が浅い日本だからこそ、既成の価値観にとられない革新を生む出す可能性が高いとも言えます。速そうでアグレッシブなカタチではなく、見る人に安らぎを与え、微笑みを誘う、そんなクルマがあってもよいはずです。そんな日本独自の美意識、価値観を新しいカタチで表現したクルマは、現代の社会においてグローバルに通用するものだと信じています」といっている。

これにのっかって考えれば、都市交通の主役が小ぶりでキャラ感のある超小型カワイイEV（クルマ）になっていくということは、現在の動くコンピュータ的とは異なるクルマ、モバイル・スーツ（モビルスーツ）的とは異なるクルマ、になるということになる。それはいってみれば、身の丈サイズの「着慣れたごさっぱりしたほどよい衣類」的とでもいうようなクルマであろう。

現在の姿でもある、動くコンピュータ的な、大きな、モビルスーツ的な、流線型のクルマは、クルマの価値が減衰していると思われる。なぜなら、それらは移動手段としてのみ存在し、つまり使用の意義のみ存在し、楽しみがあまり感じられないからだ。そういう今だからこそ、移動自体の「五感の楽しみ」の拡張が求められているようにも思われる。それはここちいい移動とでもいおうか。（ある程度の自動運転はあるのだろうが度を越えた自動運転にはならず）自ら動かすクルマ、自ら感じられるクルマ——それはデザインだけではなく、コミュニケーション的にもカワイイEV（クルマ）であろう。

つまり、カワイイEV（クルマ）というのは、外見デザインだけではなく、コミュニケーションがキーコンセプトなのである。機能とは別の次元の意義として、カワイイ存在とならなければならないのである。いきもの感や手書き感がある、人の感覚がある、そのことで人間との接点を積極的に作り出している、そういうコミュニケーション誘発装置であるからこそ湧く親しみ、それがカワイサを支えるひとつの要素だと思われ、それがクルマにも必要となってくると思われる。そこに日本独自の価値観が重要な意味を持つてくるのである。

ダニエル・ブーアスティンは、「かつてコミュニケーションと移動は一体化していた」と指摘した。そして、テクノロジーの発展が二者を分離したと述べた（『過剰化社会』）。その移動とコミュニケーションの分離は、移動体に機能のみを求め、コミュニケーションの地平から疎外していくことになった。そうした観点からみれば、カワイイEV（クルマ）は、再び移動とコミュニケーションを融合させることになるかもしれない。

移動体におけるカワイサとは何か。あらためていうまでもないが、そこにはマクロな意義があるように思われる。

## 2) カワイイEVによるコミュニケーション

原研哉は「これからはエンジンの性能というよりも、たとえば都市全体を制御して行くというような、都市とクルマ、あるいは人とクルマ、クルマとクルマのコミュニケーションがとても重要になってくると思うんです」ともいっているが、クルマのコミュニケーション機能はこれから大きな関心を集めるだろう。

カワイイEV（クルマ）が実現された場合、その社会の中での可能性、人との関係としての可能性はどのようになるだろう。以下簡単に、コミュニケーション的な変化を考えてみる。

カワイイEV（クルマ）の中でのこ

とが楽しいと思われるだろう。それは、スピードや力強さを制御できるので楽しいではなく、つつまれて居心地がいいから中であること自体が楽しい、という感じであろう。そうすると、おそらく、カワイイEV（クルマ）は男のロマンと結びついた力強い存在から解放されて、日用品、生活品、家電的な存在になるだろう。そうするとよりコミュニケーション的な意味が増していくことだろう。

カワイイデザインの社会的意味、そのコミュニケーション的な意味を考えるならば、今までのクルマとは異なるあらたな五感とのかかわりが生まれるだろう。カワイイの「自分効果」により、たとえば「気持ちいい」「やさしくなれる」「癒される」存在としてのEVと人とのかかわりが生まれると思われる。つまり、カワイイEV（クルマ）は乗る人の人格や感性とより積極的につながる存在になると思われるのである。

カワイイEV（クルマ）にのることで得られる感覚は、クルマと一体化する感

覚、そして街とも一体化した感覚ではないだろうか。それは、つつまれる感覚からくる安心感、といえるだろうか。つつまれて、その一部になるこちよさ、ともいえるかもしれない。それは、現在のクルマによって得られるモビルスーツを身にまとったものではなく、からだに合った小ざっぱりした清潔な服を身に着ける感じとなるだろう。

#### 4 今後の課題と発展

これまでは風俗学的な研究を行ってきたが、今後はよりコミュニケーション論的な研究を行う必要がある。またインタビューなども重ねより実証的な研究としていきたい。と同時に、東アジアの都市を視野に入れた「カワイイ都市」研究も行う予定である。

#### 5 発表論文リスト

研究成果の一部は『無印都市の社会学』（法律文化社、2013年7月）に寄稿している。